始林に江別行政役場管内から入地して、組長として教育衛生のことにつくし、開拓の推進に寄与し、明治四十一年に下富良野村から南富良野村が分村して以来、歴代戸長を補佐して道庁長官から表彰されたことに言及して、その永眠を落合代表の名によつて惜しんでいる。

第二節　川合嘉十

落合から国道を狩勝峠に向つて登つて行くと右の山を背景にして川合農場の事勝所跡がある。落合の開拓時代に川合嘉十翁がいて色々の構想を練つたところであるが現在高橋イトの住宅である、翁の孫にあたる川合林蔵が牧場のあとに造林したり、造林地の手入れをする事務所をかねているが、こゝの庭園は翁の生前にきづかれたもので、養鯉場から用水をひき、池も掘られていたのであつた。

全盛時代は手入れもよく行とどいていたので、小学校の生徒が遠足にきたり、落合はもちろん本村をはじめ、富良野地方から花見の客がきて盛大な宴を張つたものである。

この庭園を眼下に見下す丘の上に川合嘉十翁の碑がある。雄大な碑身が高くきずかれた台座の上に立つているが、昭和九年六月六日の建立になるもので、当時の新聞は次の様な記事をのせている。

前半生は無一文より本道有数の実業家となり、後半生は土地開拓殖林その他公益事業に一身を捧げし立志伝中の人、旭川市一条八丁目右七号の故川合嘉十翁の徳を称ふ人々によつて建立された記念碑除幕式並に慰霊祭は碑の建られし空知郡落合、川合第一農場において一昨六日午前十一時より同村有志二百余名、旭川及び各地より関係者二百余名参集の下に壮厳に挙行された

碑は縦十二尺、巾四尺の見事な御影石、施工者は真田千隼氏、碑銘は大日本愛人会専務理事松本梅吉氏の奔走にて前拓務大臣永井柳太郎閣下が特に拓殖事業に功労のあつた翁のために「故川合嘉十之碑」と揮毫されたもので全く稀有のことであらふ

盛大な除幕式は柴田上川神社々司の修祓によつて除幕され、碑を被つた上碑銘の修読が行はれ、詔霊式がすむと発起人代表田巻靖司の祭祠、村瀬南富良野村長、梶谷常次郎、松本梅吉、斎藤仙次外各代表の祝辞があり、嗣子川合倉吉の感謝の辞の後農場庭園で披露宴があつた。

翁は明治四年十月三日米沢市土橋町川合嘉四郎翁の二

川合嘉十翁之碑（除幕式）

男に生れ明治三十二年旭川に移り三十五年二条通八丁目に小間物卸商を開き踰へて大正六年一条八丁目に新築移転す、家業の傍落合に農場を営み林業を起し養鯉業を行い勤倹力行以て川合家の今日を成せり嘗つて十勝国境道路の開鑿に当りてはその所有地二十余町歩を寄附せらる等常に公益に力を尽し道庁長官を始め幾多の方面より表彰せらるゝ事敷度洵に豪農紳商の典型たり、昭和八年十一月十日病を以て卒す時に享年六十有三茲に有志相謀り碑を立て翁の遺業を後屁に伝へんとす云々

翁の法名は浄楽院釈嘉誌である。

川合嘉十が開拓時代に水門をつくり、用水をひいて約十町歩の面積に水田の様に区画した池をつくつて、鯉を飼育したことは人のよく知るところである。

現在星みよ、高橋護、大坊利助の諸氏の入地しているところであるが、水質もよく鯉もよく生長し、特に食味がよかつた。空知川の水源地帯だからもつともなことである。

昭和の初めに湯原英吉が街の住宅附近の沢で養鯉を行つたし、ルーオマンソラプチ川の三線附近で佐々木慶一が行つたこともあつた。

落合はこうして鯉が多かつたので開拓時代から鯉の刺身を喰つた人々が多かつたが、川合翁が死亡して中止してから発展せずに終つたのである。

農場事務所に保存されていた活字印刷による「川合農場小作人規定書」には、

第一条　本農場の貸付其他経営に必要なる事項はこの規定にしたがい本農場主これを処理す

第二条　土地の貸付は未開地については一定の期間内に（第四条に定むる）其土地に関する事業（開墾）を成功する望あり且つ耕作熱心と認むべき者、開墾地につきては耕作熱心と認むる者に対して之をなす

第三条　契約後鍬下を除き二十五年間滞りなく小作料を納め成績良好なる者には本契約地を無償にて甲者より乙者に譲渡することを特約せり

第四条　借受未開地は左の割合の開墾程度を下ることを得ず

始年	壱町八反歩
二年目	壱町四反歩
三年目	壱町歩
四年目	八反歩

第五条　貸付未開地に対する鍬下年限は四年とし、其期間中は全然小作料を徴収せず鍬下年限満期後引続き貸付をうけんとするものに付ては更に二十五ヶ年の小作契約をなすことを得、この場合に於て小作料一反歩につき一ヶ年に次の如し

一、馬鈴薯畑は馬鈴薯四俵

二、除虫菊畑は除虫菊一〆三百匁

三、（以下空白で書込みをする様になつている）

この様にして十八条の規定があり、小作契約証書は別紙にしてある。

これによつて大体を知ることが出来るが、初期時代の小作は地主に資本主義的にしぼりとられることはほとんどなかつた。

ことに本村ではどの農場主も小作人に物資の支給をしたが、小作料でもうけることは出来なかつたので、初め木材で金をとり、多くの者は鍬下のきれたところ、畑になつたところで売つてしまつている。

うらなかつたのは下金山の清水農場を除いては川合で筆者の調査したところによると造林に非常な力を入れ、

山火予防に対する青年の協力を求めてその頃の金で百五十円を支給し、落合の青年に土地を与えて造林をすゝめたが、青年が土地をほしがらなかつたという事実もある位である。

出征軍人の家庭に醤油をおくつたり、敬老会に金品を寄贈した。こうした先代の余徳によつて本村の他の農場牧場がほとんどその子孫の手をはなれているのに、川合農場だけは造林地として今ものこつている。

第三節　落　穂　集

さてこゝではまた別の角度から見た落合の古い人々を並べて見ると、駅逓の秋田甚平は入地も古いし、馬の飼育では職業上最も古い人と言われている。

明治四十年の香川浄貞より、山田馬太郎、飛渡十太郎が古参だつた。

小出静治より平沢久太郎、松野吉十郎という古い人もいた。皆明治三十年代の人である。

金太仁三次郎、山上富次郎は四十二年頃の人、谷村秀吉、福田藤一は落合では最も古い村会議員ではかまをはいて会議に臨んだ頃のことである。

落合の全盛時代は狩勝のトンネルが開通せず、機関区がこゝにおかれていた時で、きた人々は皆落合に泊つた。

造材そのものの全盛期もその頃だつたので、随分はなやかな景気にいろどられたことがあつたのである。

落合でのラジオの初めは東京朝日新聞が持つてきてきかせたのが初めであるが、よくきこえなかつた。個人で最も早いのは湯原栄吾の昭和三年と言われているが、落合での顔役だつた。

さてその好敵手は田中文吾で、落合のうんだ木材界の相田仁太郎はこの人の後援で基礎をかためたのである。

落合小学校は初めは寺小屋だつたが、この一年生に入学した人で今いるのは煙草屋の小川ハルである。

落合八幡神社に「神社号」を書いた額がかゝげてあるが、これは小川弥助翁の寄贈によるものである。

落合の駅はもと木工場の方にあつた。現在の位置になつたのは、トンネルが開通して機関庫が富良野と新得に移つたからである。

落合の最も景気のよかつたのは機関庫のあつた時代で四戸建の官舎が四〇棟もあり市街には浴場まであつた。料理店が七軒、半玉、芸者、酌婦が六十七名名いた。造材関係者がはなやかにあそんだのもその頃である。